

氏名	黄逸
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	東アジア文化博第40号
学位授与の日付	2019年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	英字新聞に見た蒲安臣使節団と岩倉使節団 —通商・宗教問題などをめぐる文化交渉の諸相—
論文審査委員	主査教授 陶徳民 副査教授 中谷伸生 副査准教授 池尻陽子

## 論文内容の要旨

本論文は、蒲安臣（バーリンゲーム、Anson Burlingame 1820–1870）使節団と岩倉使節団のアメリカ、イギリス、ドイツ訪問に関する一八七〇年前後の英字新聞の報道を素材に、通商や宗教問題などをめぐる清国・日本と西洋諸国との文化交渉の諸相を考察したものであり、序章、本論五章と終章という構成である。

序章「蒲安臣使節団と岩倉使節団を比較研究する試み—英字新聞を素材に—」において、蒲安臣使節団と岩倉使節団に関する研究史を回顧する上で、従来、両使節団に関する比較研究が十分になされてこなかったため、価値ある研究である。本研究では、天津条約と安政条約の改訂の必要性および十九世紀後半の「同光新政」と「明治維新」にあたって派遣された清日両国の遣外使節団に関する比較文化史、比較思想史的研究の意義が指摘された。

第一章「英字新聞に見た一八六〇年代までの清国と日本」では、一八六〇年代までの清国と日本の国際的イメージを考察するものである。Macartney 使節団と Amherst 使節団の清国訪問や三浦按針による江戸初期の英日貿易回顧を論じた第一節「1840年以前の清国と日本—英紙における初印象」と、清日両国の国民性に関する英語圏の議論を紹介した第二節「一八四〇年代—一八六〇年代の清国と日本」などにより構成されている。

第二章「蒲安臣使節団、岩倉使節団の派遣とお雇い外国人の助言」は、清国のお雇い外国人の R. Hart と蒲安臣、日本のお雇い外国人のフルベッキの役割を比較し考察したものである。清国に渡ったアメリカ人宣教師の W.A.P. Martin が編集した漢訳『万国公法』の幕末日本への影響を考察する第一節「清国と日本における近代的国際秩序の受容と近代的国際法の導入」、総税務司 ハートと清国駐在米国公使蒲安臣による対清協力政策および蒲安臣の使節団首班の拜命経緯を考察した第二節「Robert Hart と蒲安臣使節団の派遣」、フルベッキの使節派遣に関する建議の経緯を考察した第三節「フルベッキと岩倉使節団の派遣」、フルベッキの「ブリーフ・スケッチ」と Hart の「局外旁観論」を分析した第四節「近

代外交使節派遣における清日のお雇い外国人の役割」などが含まれている。

第三章「太平洋を越える握手——一八七〇年前後の米紙に見た蒲安臣使節団と岩倉使節団——」は、両使節団の米国訪問に関する米紙の報道を考察したものである。蒲安臣の清国使節団首班拜命にアメリカ人の使命と栄光を感じる米国側の自負、開国後の日本が急ピッチで近代化を進めるだろうという米国側の予測を紹介した第一節「出発前後に関する報道」、渡米した清国使節団員の対外観の変遷および日米関係の建設的な発展に対する期待を考察した第二節「滞米中の様子に関する報道」、および太平洋横断航路の開通による米清日貿易圏の形成に関するアメリカによる対清・対日政策を分析した第三節「米紙に見える清国観と日本観」などにより構成されている。

第四章「大英国を訪れた蒲安臣使節団と岩倉使節団——一八七〇年前後の英字新聞をめぐる——」は、両使節団の訪英体験を考察したものである。イギリス人宣教師に関わる揚州教案をめぐる紛争および清国近代化に対するイギリスの支持を求めた蒲安臣の折衝を紹介した第一節「蒲安臣使節団の訪英経緯——「教案」紛争の中の折衝」と、使節団を歓迎し英日経済関係の緊密化に期待する各地の商工会議所の態度を論じた第二節「岩倉使節団の訪英行程——「政冷経熱」の旅」、および西洋近代文明の受容に清日両国の異なる姿勢を分析した第三節「英字新聞に見たイギリス人の清国観と日本観——The Times の論説を手掛かりに」などが含まれている。

第五章「プロイセン・ドイツを訪れた最初の清国・日本の使節団——一八七〇年前後の英字新聞から——」は、蒲安臣使節団と岩倉使節団による独清・独日間の交渉を考察したものである。湯若望や郭士立、Kaempfer や Siebold などを媒介とする独清・独日間の初期交流や、プロイセンの Eulenburg 伯爵の東アジア遠征、文久遣欧使節団と斌椿視察団などを考察した第一節「一八七〇年にいたるまでの独清・独日間の交渉——歴史的回顧」、蒲安臣使節団および岩倉使節団とビスマルクとの書簡交換や会見を検討した第二節「英字新聞に見た蒲安臣使節団と岩倉使節団」、一八七〇年代から一八八〇年代早期にかけての独清関係、および日本のドイツ受容の状況を分析した第三節「一八七〇年以後の英字新聞に見た独清日関係——The Times の報道をめぐる——」などにより構成されている。

終章「蒲安臣使節団と岩倉使節団の成果——英字新聞に見た評価——」では、蒲安臣使節団と岩倉使節団の交渉成果とその後の両国の近代化にもたらした影響を比較した。

## 論文審査結果の要旨

本論文は、提出者がその日本語、英語およびドイツ語の語学力を駆使し、広範囲の一次資料を探って、それらを活用した労作である。扱ったテーマは、これまでなされてこなかった、1870年前後の日清両国が派遣した、欧米を歴訪し条約改正を図るとともに近代西洋文明を視察することを使命とする最高レベルの使節団に関する比較文化史、比較思想史的

研究である。この前人未踏の領域に関する最初の本格的な研究の試みについては、高く評価すべきであろう。

そして、西洋文明に対する両使節団の姿勢と態度、両使節団に対する欧米社会の反応と印象、およびその帰国後に果たされた近代化への促進効果などについて、本文および脚注の中で多くの貴重史料が翻訳されているので、この分野の今後の研究者にとってきわめて有益な参考になることはまちがいない。

しかし、論文には、次のようないくつかの弱点もある。まず、必要以上に日清両国と欧米諸国のそれぞれの対一の交渉前史という背景を詳述したため、1870年前後の両使節団およびその役割に対する焦点化した論述がやや疎かになってしまったことを指摘できる。そもそも、両使節団の派遣は天津条約と安政条約で決められていた条約改正の期限に迫られたという事情があったが、その背景に関する紹介には丁寧さが欠けている。

なお、英字新聞を扱う上で注意すべき点は、「明治日本は開明的、清末政府は保守的」というステレオタイプの先入観や、東アジア諸国に関する予備知識がきわめて貧弱な西洋人の議論における偏見に囚われてはならないことであるが、論述の一部にはそのように見受けられても仕方がない箇所がある。

にもかかわらず、論文全体としては多くの新知見を提供した意欲的研究だと評価できる。よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。